幼児の感情の発達研究Ⅲ

社会性の発達と感情の発達の関連的考察

児玉 省 岡田 正章 檜葉 和英 島谷 正美 田村 忠夫
 (児玉教育研究所) (明星 大学) (檜の実幼稚園) (幼児体育研究所) (幼児体育研究所)

(研究の目的)

本研究の目的は1982年応用心理学会で発表された「幼児の社会性の発達Ⅲ」と今学会で発表の「幼児の感情の発達研究Ⅱ」との比較検討とする。

(研究の方法)

社会性調査9角度(接触・依存・愛情・支配・従順・拒否・競争・模倣・責任を負う・自律性)感情の調査13角度(喜悅・愛情・不気嫌・嫌い・怒り・恐怖・過敏・嫉妬・はすかしがる・くやしがる・さびしがる・かなしがる・よく泣く)両調査の全体を通して角度の評価結果を比較検討する。ただし、社会性調査の9角度においては対大人関係のみを取り上げた。

(結果と考察)

社会性・感情両調査共に親も先生もA評価の高い角度は、接触・喜悅・愛情であり親の方が先生よりもA評価の出現率が高い。これは、親の方が先生よりも子供に対してより受容的なためではないだろうか。子供は家庭にいる時の方が幼稚園にいるときよりもよく話をしたり愛情表現を多くする傾向にある。親に対しても先生に対してもいつもうれしそうで、親切であるが親の前の方がより自由に自己表現する傾向が見られる。

先生のみA評価の出現率が高い角度は、責任を負う・自律性・従順でありこれは集団生活の中で子供を見る立場から子供にとってより望ましい態度であるという意識が働いたための結果ではないだろうか。また子供も先生に認めてほしいという気持ちから自己をコントロールしているのであろう。率直な面をよく見せ集団生活の中で責任をよくはたし自律している傾向が見られる。上記の角度について親は、B評価の出現率が高く子供の加齢と共にA評価の出現率が高くなる。これは、親の前では甘えてはいるが子供はそれなりに責任も果たし自律もしてきていると我々を見ている親の見方の現われではないだろうか。無意識のうちに子供をよりよく評価したいという親心の現われと言えるかもしれない。

先生のみC評価の出現率が高い角度は、支配・拒否・嫉妬であり、これもまた集団生活の中で子供を見た場合、望ましくない態度・行動であると先生が判断して

おり子供自身がそれを感じて自己の感情をコントロールしているためではないかと思われる。先生の前では、嫉妬の感情をほとんど見せないし、先生の指示によくしたがっている。

親も先生もB評価が高い角度は、依存・競争・模倣・不気嫌・嫌い・恐怖・過敏・怒り・はすかしがる・くやしがる・かなしがる・よく泣くであり、親の方がより出現率が高い。先生の前より親の前の方が、自己をストレートに出しているためと見られる。家庭にいるときのほうが幼稚園にいるときよりも依存傾向が強く親の前でも先生の前でも同様に自慢したりする。先生の態度や行動より親のまねをすることのほうが多く、集団の中ではいやな感情をかなり抑えているようである。恐れや過敏な行動は、親の前でも先生の前でも同じように表出する傾向にあるが、親の前の方がより多くそれらを見せている。親の前でも先生の前でも同様にあがりやする傾向があり、先生の前より親の前の方がくやしがりさびしうな顔をしたたり、かなしうなようを見せてたり、泣き虫であったりする傾向がある。

以上の考察全体を通して、子供が幼稚園という集団の中であるいは親という受容者の前その状況に応じて自己の感情をうまくコントロールしている姿が浮かびあがってくるのではないだろうか。

社会性・感情両調査の評価結果の中でA,B,C評価の出現率が年齢・性別によつていちじるしくちがう角度がある。まらいという角度の先生の評価を4才5才6才で比べてみると4才と6才の女子ではC評価の出現率が低いにもかかわらず5才の女子の評価の出現率がいちじるしく高い。嫉妬という角度の親の評価を4才5才6才で比べてみると4才と6才の女子ではC評価の出現率が低いにもかかわらず5才の女子の評価の出現率がいちじるしく高い。恐怖・さびしがる・かなしがるの角度の先生の評価を4才5才6才で比べてみると4才5才の女子ではB評価の出現率が低いにもかかわらず6才の女子の評価の出現率がいちじるしく高い。競争という角度の先生の評価を4才5才6才で比べてみると4才と6才ではB評価の出現率が高いにもかかわらず5才の評価の出現率がいちじるしく高い。

三段階評価		A=非常に						B=時々						C=ほとんどない					
社会性		4才		5才		6才		感情		4才		5才		6才					
角度		P	T	P	T	P	T	角度		P	T	P	T	P	T				
		B	G	B	G	B	G			B	G	B	G	B	G				
接触	A	60	50	50	35	50	40	喜悦	A	70	60	55	45	65	40	60	40		
	B	35	45	45	60	45	50		B	25	40	35	55	30	55	25	30		
	C	7	5	5	15	3	7		C	0	0	0	0	0	0	5	5		
依存	A	12	13	10	10	3	50	愛情	A	50	45	20	40	40	50	30	45		
	B	85	65	25	50	85	45		B	45	55	25	55	55	45	65	50		
	C	1	20	13	40	12	25		C	0	0	5	5	0	5	5	5		
愛情	A	65	35	61	25	55	25	不気嫌	A	0	0	0	0	0	0	0	0		
	B	35	55	35	60	45	70		B	50	70	50	60	55	25	35	40		
	C	3	8	1	13	0	7		C	45	30	50	40	45	25	60	60		
支配	A	15	15	5	15	7	5	嫌	A	5	0	0	0	5	0	0	0		
	B	80	40	25	35	65	45		B	55	55	50	65	30	60	35	35		
	C	1	45	20	55	25	50		C	40	40	50	35	60	60	65	55		
従順	A	25	60	30	65	30	55	怒り	A	0	5	0	0	0	0	0	0		
	B	75	40	70	40	70	45		B	75	80	45	45	70	25	55	30		
	C	0	0	0	0	0	0		C	20	20	55	55	25	25	45	70		
拒否	A	7	1	5	1	1	0	恐怖	A	10	15	5	10	10	0	0	5		
	B	80	35	25	25	70	35		B	60	60	55	45	80	25	45	50		
	C	15	60	20	25	25	65		C	20	20	40	40	5	20	55	45		
競争	A	25	55	20	15	15	10	過敏	A	20	15	5	5	25	5	5	15		
	B	60	45	65	55	75	70		B	60	65	70	60	60	65	60	70		
	C	15	3	15	30	10	20		C	20	15	25	0	10	30	35	25		
模倣	A	15	10	15	8	5	12	嫉妬	A	5	5	5	0	0	5	0	5		
	B	70	55	55	45	70	60		B	40	60	20	25	35	40	20	15		
	C	15	35	25	45	25	25		C	50	35	80	70	65	60	80	80		
責任	A	35	65	45	70	55	55	はぶか しがる	A	10	5	10	5	10	20	5	5		
	B	65	40	55	30	45	45		B	60	80	75	70	85	25	70	65		
	C	0	0	0	1	3	3		C	20	15	20	25	0	10	30	30		
自律	A	25	50	40	70	60	70	やがる	A	20	10	5	0	10	5	0	5		
	B	75	50	60	30	40	30		B	70	60	40	40	70	25	55	35		
	C	0	0	0	0	0	0		C	10	20	60	60	15	20	45	70		
	A	5	15	0	5	10	10	さびがる	A	5	15	0	5	10	10	0	5		
	B	80	70	55	55	60	70		B	80	70	55	55	60	70	45	40		
	C	10	15	45	40	25	20		C	10	15	45	40	25	20	55	55		
	A	0	0	5	5	0	0	かながる	A	0	0	5	5	0	0	0	0		
	B	60	65	45	45	50	70		B	60	65	45	45	50	70	35	40		
	C	40	20	50	45	45	15		C	40	20	50	45	45	15	65	55		
	A	10	15	5	5	10	10	よく泣く	A	10	15	5	5	10	10	5	5		
	B	50	65	50	45	50	65		B	50	65	50	45	50	65	40	30		
	C	40	10	40	45	35	20		C	40	10	40	45	35	20	55	60		

P=親 B=男子
T=先生 G=女子

拒否という角度の先生の評価を4才5才6才では比べてみると4才と6才ではC評価の出現率が低いにもかかわらず5才の評価の出現率が高い。このようなことから5才の年齢で出現率が急激に高くなったり低くなったりする傾向の角度や4才5才で出現率が同じであるが6才で急激に高くなる角度もある。これらの角度については今後検討の必要があるように思える。

今回出来なかつた社会性の対子供関係との比較検討及び社会性下位項目との比較検討ならびにケース研究

を今後行なつてゆきたいと考える。